ドキュメンタリーDVD 上映会&講演会 IN 愛知(2)

ドキュメンタリーDVD の上映後は、講演 1:人工呼吸器ユーザー　成人、子どもの視点から。最初に NPO 法人ピース・トレランス代表の押富俊恵さんが、「地域で暮らして想うこと～医療職として、当事者として」のテーマで講演。

ピース・トレランスは 2015 年 12 月 14 日に設立され、愛知県尾張旭市を拠点に活動する NPO。活動分野は「保健、医療又は福祉の増進を図る活動」、活動内容は「市民の方々に障害の重い方々の日常生活を知っていただき、ハンディを持った方々にとって住みやすい街とは何かを考えていただきながら『ともに生きる』『全ての人が幸せに生活できる』 地域を創りだすための啓発活動」。じつは押富さんとは昨年今ごろ、バクバクの会の懇親会でお会いした。先の DVD のなかにも、その時の写真が登場し、びっくりした。その後もフェイスブック「仲間」として交流している。私の寒いダジャレにも厳しい指摘を。評判の「押富節」を楽しみにしていた。まさに押富さんの人生と、人柄を感じさせる講演だった。くるま椅子の特注の台の上でパソコンを自在に操作する押富さん。とりわけ印象に残った言葉のいくつかを紹介したい。

押富さんは 24 歳のとき「重症筋無力症」になった。それまでは健康優良児であり、「健常者歴 24 年、障害者歴 12 年」に。病気になる前には、リハビリテーション病院に勤務する作業療法士。「私は健常者から障害者になったと同時に、医療職という支援する側から、障害当事者という支援される側になりました。」

話は介護を受ける側になって感じるストレスに。「いちいち言葉にしなくては伝わらないのがなんとも私の心をイラつかせ」と。(講演でも紹介されたが、押富さんのフェイスブッに毎週のように具体例が)　今の私にとって人口呼吸器は「活動の幅を拡げるもの」。日常生活で欠かせない医療的ケアは、「医療行為」というよりは「生活の一部」。

話は変わって、全国の「佐藤さん、鈴木さん、高橋さん、田中さん、伊藤さん」と、全国の障害者手帳所持者はほぼ同じ数。でも障害者の知り合いは、かなり少ないのでは。その原因として、子どもの時期に「障害のある・なしで分けられる」ことに問題の一端があるのでは。(話の展開、比較のやり方がうまい。分かりやすく、とても参考になる)

最初から「分ける」という指摘は、あとの講演や質疑でも話題に。私も今回の企画でもっとも考えさせられ、課題と感じている点である。講演をさらに紹介していこう。

(2017 年 6 月 28 日)